

グローバル社会で求められる教員の資質・能力

田中 博(本学教職研究科准教授 国際教育・科学教育)

もう 10 年以上前のことになりますが、高校生を引率してタイ研修に赴いた際、バンコクのスワンナプーム空港を生徒たちと歩いていました。すると、私たちを足早に追い抜いていった男性が突然振り返り、「田中先生!」と声をかけてくれました。よく知っている卒業生でした。出張でタイに来ていたようで、帰国便の時間が迫っているとのことで、挨拶もそこそこに去ってしまいました。

こんな偶然もあるものだと思いながら搭乗口で座っていると、今度は女性が目の前に立ち、「立命館の田中先生ですね?」と声をかけてくれました。「卒業生の方でしょうか。申し訳ありませんが、どなたか思い出せなくて」と答えると、「2006 年にタイの Mahidol から立命館高校へ短期研修に行った際、先生にお世話になりました」とのことでした。あまりに流暢な日本語だったため、日本人だと思い込んでいたのです。彼女はタイの高校を卒業後、立命館アジア太平洋大学 (APU) に進学し、日本企業に就職。現在はバンコク支店で勤務しており、その日は大阪本社への出張だったそうです。

日本から遠く離れた場所で、短時間のうちに二度も知人と再会するという偶然に驚きました。しかし、よく考えてみれば、これはもはや「偶然」と言い切れない時代なのだと思うようになりました。世界はグローバル化し、人の往来はボーダレスになっています。京都の街中で買い物をしている時も、タイの空港にいる時も、その境界はほとんど感じられません。現在の生徒たちは、将来さらに広い世界で活躍していくことでしょう。コロナ禍で一時的に停滞した国際交流もようやく回復しつつありますが、世界情勢は依然として不安定で、順風満帆とはいきません。それでも、グローバル化の流れは確実に進展し、ニューヨークで出会った友人に「では、来月はケニアで」といった挨拶が当たり前になる時代が来るのだと思います。

このような社会において、教員に求められる資質・能力が大きく変化するのは当然です。社会がボーダレスに動いているにもかかわらず、ボーダレスに動ける人材はまだ十分とは言えません。企業では海外赴任はおろか、海外出張さえ敬遠される傾向があると聞きます。しかし、中高生や大学生の時期に充実した海外研修を経験した人は、「誰も行かないなら、私が行きますよ」と気軽に手を挙げてくれるようです。

では、その「充実した海外研修の経験」とは何でしょうか。その本質を明確に捉え、それを満たす研修を多くの生徒に経験してもらうことが重要です。もちろん、国際性の涵養は海外研修だけでなく、学校内外のさまざまな機会で指導できます。しかし、海外研修には、生徒の成長を効率的に促す仕掛けが多くあります。

また、海外研修に限らず、学校行事の運営方法はどこで学ぶのでしょうか。多くの場合、先輩教員と共に運営に携わり、その姿を傍らで見ながら技を盗み、体得していくのではないのでしょうか。まさに職人技の継承に近い構造です。教員を目指す学生は教科指導については体系的に学びますが、学校行事の運営は重要な仕事であるにもかかわらず、特定の教員に負担が集中しがちです。社会のグローバル化を踏まえると、国際教育についても理念はもちろんですが、具体的な手法を多くの教員が学ぶ必要があります。

こうした力を育むために、本研究科では海外研修を実施しています。今年度はカンボジア研修を計画しています。カンボジアは古い歴史を持ちながら、ポル・ポト政権崩壊後の内戦を経て、国家として再出発したのはわずか 20 年ほど前という新しい国です。教育の再生は目覚ましく、非常に興味深い事例を多く見ることができます。院生には、こうした世界を実際に見て国際性を伸ばすとともに、学校現場で海外研修がどのように運営されているのかを、年間を通した事前学習で学べるような仕組みを整えています。